

15 『日はまた昇る』

『日はまた昇る』(The Sun Also Rises, 1926) は、アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961) が過ごした1920年代のパリのみならず、闘牛観戦やサン・フェルミン祭での体験を主な題材としており、出版当時であれば、ほとんどの登場人物たちのモデルが特定できるモデル小説でもある。物語は第一次世界大戦を経験することにより、伝統的な既存の価値観を喪失し、新たな価値観を見出せないまま根無し草的、虚無的な享楽の生活を送る若者たち、つまり「失われた世代」(Lost Generation) を写実的に描いた作品として評価されてきた。またヘミングウェイの母親グレースは、登場人物たちによる大量飲酒などの感覚的な喜びの充足を、第一次世界大戦前に称揚された理念や道徳の転覆として捉え、この作品を「最も汚らわしい本の一つ」(Baker, Life 180) だと酷評する手紙を息子に書き送っている。

しかし、アングロ・サクソン系の登場人物たちが抱く人種意識に焦点を当てて読むと、「失われた世代」が必ずしも彼らの親の世代に見られた価値基準のすべてを放棄してはいなかつたことがわかる。世紀転換期以降のアメリカにおいて、新移民の急増に危機感を募らせていたアングロ・サクソン系プロテスタント移民の間で芽生えたネイティヴィズム(Nativism)は、第一次世界大戦を契機に変化することなく登場人物たちの意識に深く根付いており、この点では伝統的な価値体系を忠実に守る彼らの姿を見る能够である。

第一次世界大戦に参戦中、砲撃を受けて性器を負傷した語り手ジェイク・バーンズは、物語当初において売春婦ジョルジェット・ホビンとともにパリのダンスホールに登場する。一方、ジェイクとのロマンティックな愛の不毛性に悩むブレット・アシュリーは、同性愛の男たちとともに同じダンスホールに現れる。このような性不能者と売春婦、異性愛の女と同性愛の男たちという組み合わせ、つまり男女間における身体的結合の不能・拒絶は、ネイティヴィズムの重要な戦略の一つでもあるだろう。しかしジェイクの戦傷がもたらした性不能は、旧移民の人種的再生産にとっての災難、つまり戦闘員として耐えられない「不適者」の子孫のみが生き残り、彼らが再生産されることで、アメリカの人種的退化がもたらされるのではないかという20世紀初頭の優生学者たちが恐れた逆淘汰の可能性を暗示している。

彼らが抱いていた人種上の危惧は、ジェイクによっても共有されている。彼は第一次世界大戦がアングロ・サクソンの文明にとって災難であったことを認識しながら

ら、自らが直面する現実に対してやりきれない思いを抱いているのだ。その一方で、ジェイクはカトリック教徒である。つまり彼はユダヤ人口パート・コーンと同じく、当時のアメリカにおいて「望ましくない外国人」に分類される周縁的な存在なのだ。しかし彼のカトリック教徒としての側面は、曖昧で不自然なものとして描かれている。また彼はアングロ・サクソン系プロテスタン移民の側に寄り添いながら、コーンとは一線を画そうと試みてもいる。さらにジェイクを含む登場人物たちが、出版当時のアメリカにおいて見られた異人種混交（miscegenation）に対する不安を抱きながら行動している点も特徴的である。

物語結末部において、ロマンティックな愛の可能性をなおも模索しようと試みるブレットに対するジェイクのセリフ「そう考えるのもいいんじゃないか」（198）は、原稿の段階で何度も書き直しが行われた箇所である。しかもこの修正作業を経て、最終的に受容を内包しながらも明確に拒絶する彼の精神的態度をより如実に表すセリフに変化している。それはジェイクにとって性不能者という隠しようのない現実を肯定することであり、ブレットのみならずアメリカの純血を守る戦略に加担する暗黙の身振りとしても読める。

『日はまた昇る』はアメリカを舞台とすることはないものの、登場人物たちにはアングロ・サクソン系プロテスタン移民を頂点とする人種上の序列を維持するためのネイティヴィズムというアメリカを隠微に支配するイデオロギーが刷り込まれていることがわかる。物語のこのような側面は、「失われた世代」の旗手と見なされていた作者ヘミングウェイもまた、人種意識の面では戦前のアメリカに見られた価値基準を忠実に受け継いでいたことを逆照射していると考えられるだろう。

また物語全体を通して見られる反ユダヤ主義を巡る相矛盾した描かれ方は、その要因をヘミングウェイの伝記的背景に見出せるだろう。1920年代初頭に前衛芸術最先端の地であったパリで文学修行に励んでいたヘミングウェイは、エズラ・パウンド（Ezra Pound, 1885-1972）およびガートルード・スタイン（Gertrude Stein, 1874-1946）から技法上の影響を受けているが、パウンドが悪意に満ちた極めて深刻な反ユダヤ主義者であった一方で、スタインは信仰心の厚いドイツ系ユダヤ人だったのだ。作品に表出するユダヤ人を巡る特異な描かれ方は、ヘミングウェイが抱いていたユダヤ人像がパウンドとスタインという二人の師の間で揺れ動いていたことを物語るものとして読める点もこの作品が持つ特徴の一つである。

（本荘 忠大）